

氏 名 染谷 智幸

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 223 号

学位授与の日付 平成25年3月22日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 西鶴小説新論－東アジアへの視界－

論文審査委員 主 査 教授 山下 則子
准教授 神作 研一
准教授 相田 満
教授 篠原 進 青山学院大学
教授 中嶋 隆 早稲田大学

論文内容の要旨

井原西鶴は日本を代表する小説家である。しかし同時に西鶴は、東アジアを代表する小説家でもある。西鶴は東アジアの文化史、特に古典文学史や小説史の中でどのような位置にあるのか。本論文は、この点の解明を最終的な目標にして、様々な角度から検討を加えたものである。

本論文は、論文全体の概要を論じた総説（第一部）に続き、次の三部から成る。

- A 西鶴小説を「東アジア」「17世紀の時空」の視座から把握したもの（第二部）
 - B 西鶴小説を「男色」「武士」の世界から把握したもの（第三部）
 - C 西鶴小説の対照的構造を明らかにし、その構造の持つ世界観を把握したもの（第四部）
- 以下記号順に第二部～第四部の要旨をまとめる。

A 西鶴小説を「東アジア」と「17世紀の時空」に置いた場合、どのような新たな特色が浮かび上がって来るのか。第二部ではそれを、

- (一章) 東アジア 17 世紀における歴史的文化的背景
- (二章) 西鶴の同時代小説、中国『金瓶梅』、朝鮮『九雲夢』との比較
- (三章) 東アジア 17 世紀における仏教的背景
- (四章) 東アジアにおける性文化の伝播と広がり
- (五・六・七章) 東アジアにおける遊廓とその文化的背景
- (八・九・十章) 東アジア 17 世紀における、都市と経済の発展と小説

から分析した。その結果、13 世紀～17 世紀の大交流時代、主に重商主義的発展にともない、人間中心で自由闊達な文化が東アジアで産声を上げたものの、それを後代に受け継ぐことが出来たのが主に日本であったこと。その継承こそがアジアにおける日本の逸早い近代化を準備したこと。その継承・発展のラインの中心に西鶴という作家が位置し、同じく人間中心で自由闊達な世界を小説の中に描き出していたこと、が分かった。特に、西鶴が描いた武士と商人の、対照的でありながらも、相互補完して一つの世界を作り上げている姿は、東アジア海域で活躍した武商一体の倭寇勢力や、日本の商人・武士が発展し成長した姿として捉え直すことが可能である。

B 西鶴は明治以降の西歐的近代文学の要請から「リアリスト西鶴」と呼称され、リアリズム（現実主義）文学の日本における元祖として位置付けられてきたことは周知のことである。それが江戸時代の中後期に埋没していた西鶴の評価を高め、新しい光を当てたことは言うまでもないが、その「リアリスト西鶴」が西鶴小説の一面を深く理解させたものの、それによって西鶴小説の持つ他の魅力が切り捨てられ、西鶴の全体像が歪んだものになってしまったことは間違いない。第二次世界大戦後、そうして切り捨てられた魅力や全体像の再構築が盛

んに行われることになったのだが、それは不徹底に終わった。何故ならば、切り捨てられた中で最も重要なものが『男色大鑑』であったにも関わらず、これを十分に汲み上げてこなかったからである。

この『男色大鑑』や他の作品中の男色譚、そして武家物作品を解読することによって、忘れられていた西鶴の精神構造にスポットを当てつつ、従来の歪んだ西鶴像の修正を試みようとしたのが三部の諸論考である。

- まず、西鶴作品中、最も大部である『男色大鑑』が、
- (一章) どのような歴史的文化的背景を持って登場してきているか
 - (二章) どのような世界を特徴として描き出しているか
- を検討するとともに、作品自体に、
- (三章) 長期にわたる成立時期
 - (四章) 複雑な成立過程

が想定されることを導き出した。また、そこで得られた豊かな武士の世界観は、西鶴の武家物である『武道伝来記』の世界を理解するにも役立つ。従来、西鶴が商人層の出身であることをもって、武家社会への深い理解は不可能という偏見から、西鶴の武家物は低い評価に甘んじて来たが、『武道伝来記』に描かれた、

- (五章) 武士の水平的関係
- は当事者の武士の意識・常識を超えるほどに深く、武家社会の一面を鋭く抉り出していた可能性があることが分かった。従来、我々が漠然として抱いてきた西鶴へのイメージ、すなわち「町人作家西鶴」は、その根本から見直す必要が生まれてきたとも言ってもよい。

なお『男色大鑑』に描かれた男色のルーツを辿れば、それは日本を越えてアジアやメラネシアの文化に行き着く。その男色文化の広がり的一端を、第一章に引き続いて、

- (六章) 東アジアの新出男色文化関係資料
- で論じた。アジアには男色や武士（武人）を取り上げた文献や文学作品が多く、今後の調査によって、西鶴を始めとする日本の男色、武士の作品群の文化的背景が明らかになるだろう。

C 「男色」「武士」に注目したことは、私に、もう一方の極である「女色」「商人」にも目を向けさせることとなった。その結果、西鶴小説の世界には、「女色」と「男色」、「武家」と「商人」の対照的構造があり、それが貞享三年～元禄二年までの西鶴中期の作品群に最もよく表れていることが分かった。そこで、第四部ではまず、

- (一章) 『好色五人女』
- を取り上げて、この作品における「女色」「男色」から季節や「海」「山」などの地理的感覚に至るまでの対照性を炙り出し、その「女色」「男色」の対照性が、
- (二章) 『好色一代女』と『男色大鑑』
- において極まっていることを指摘した。またその対照性は「武士」「商人」の対照に受け継がれ、
- (三章) 『武道伝来記』と『日本永代蔵』

においてピークを迎える。従来、西鶴小説への高い評価は、前期の『好色一代男』を中心に

したもの、晩年の『世間胸算用』『西鶴置土産』を中心にしたものがあつたが、『好色一代女』『男色大鑑』『武道伝来記』『日本永代蔵』の四作品を中心にした中期の作品こそが、西鶴文学の最も良質な部分が表れたものだと考えなくてはならない。

しかし、西鶴の晩年の作品には、そうした中期の作品群とは全く違った文学的な原理が働き始めていた。それは短篇（掌篇）とも言うべきスタイルを持った小説の、その制約を逆手に取った新たな方法であつた。（四章、五章）

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、西鶴の浮世草子について、17世紀東アジア海洋域の歴史的文化的背景を視座に置いて論じた、従来にないスケールの大きな研究であり、西鶴浮世草子の諸作をとらえなおした多くの新見を提示している。

即ち今まで研究されることの少なかった『男色大鑑』を取り上げ、内容的には前半部の精神性の優位に着目し、貞享2年(1685)修版『改正広益書籍目録』に『男色大鑑』の冊数と作品名が記載されることなどから、従来貞享4年とされていた刊年に疑問を呈し、巻1の1の複数の記述から、貞享元年暮頃には原型が成っていたことを論証して、『好色一代女』とほぼ同時期に執筆されたものであることを指摘して、『男色大鑑』の成立には3部3段階という経緯が存するとしたのは着実な成果である。

その新しい成立論から、従来好色物から武家物への橋渡しとして位置づけられていた、『男色大鑑』を、『好色一代男』から女色で発展させた『諸艶大鑑』、男色で発展させた『男色大鑑』と、併置される位置づけへととらえ直し、『男色大鑑』『好色一代女』のような対照性を持つ作品がほぼ同時に制作されていることが、後の武家物・町人物作品の内容の対照性に発展していることを指摘した。そしてこれらの対照性を備えた作品が数多く作られた中期こそが、西鶴の最も良質な部分が表れたものとし、従来高く評価されていた晩年作品群の「借景的創作方法」の各作品の独自性を丁寧に論じつつも、それとは異なる創作方法を持つ中期作品群を最も優れているととらえなおした点が高く評価される。

特に西鶴が住んでいた大坂の谷町筋・錫屋町が武家屋敷と町人居住地の狭間にあるという「空間」にも着目し、西鶴浮世草子の「対照的構造」という視点で『武道伝来記』『日本永代蔵』の中期武家物や町人物を再評価したことも注目される新見である。

更に『男色大鑑』が男色小説の見られる東アジア世界への繋がりとなる点、『好色一代男』のような作品の自由闊達さを、東アジア海洋域にルーツを持つものとした点、東アジア海洋域の商業発展に日本の武士・商人が関わっていたことと、西鶴が描いた武士・商人が対照的でありつつも相互補完しながら世界を作り上げていくあり方との共通性に着目する点など、東アジア海洋域での日本の武士と商人が置かれた歴史的状況を踏まえた斬新な視点からの指摘が多数見られる。加えて朝鮮の『紀伊齋常談』(申請者発掘の新出資料・現ソウル大学所蔵)、中国の『蟹婉争奇』の紹介・翻刻、及び中国福建省の契兄弟風俗との比較等は、申請者の韓国・中国文学への深い造詣と語学力に裏打ちされた卓見であり、今後の研究の広がりの可能性もふくめて評価される。

このように、本論文は多様な視点と可能性に満ちており、かつそれを論証して西鶴研究の新しい地平を拓いた論考としての存在意義は高く、博士の学位を授与されるにふさわしいものであると判断する。